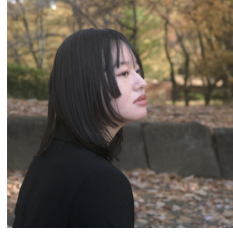


FACE2026 グランプリ

吉田茉莉子 Yoshida Mariko 《天泣》



1997年生まれ 神奈川県在住
 2019年 SICF20 EXHIBITION 出展
 第55回神奈川県美術展 入選
 2020年 「矢中の杜展覧会」茨城県つくば市
 2021年 筑波大学大学院 修了
 個展「わたしは画家になりたい」Gallery KINGYO・東京
 2024年 第26回世界絵画大賞展 ベベオ・ジャボン賞
 2025年 FACE2025 入選

14回目となるFACE2026のグランプリは吉田茉莉子さんの《天泣》が受賞、当館の新たな収蔵品となりました。「自然が生み出す根源的造形や事象」をテーマに制作している吉田さん。審査では、原生林と命の織りなす神話を思わせる世界観と、大胆な筆使い、スケールの大きな印象が評価されました。

FACE2026の入選作品は57点、応募作品は1,271点で前年比3.1%減とはいえ、22倍という高い入選倍率でし



齋藤大《ウォータープレイ》
 2025年 油彩・アクリル／カンヴァス 作家蔵

た。入選者の応募時年齢は18〜73歳、平均年齢は34.6歳。入選審査では、4名の審査員が、作家名と年齢、性別、所属などを伏せて応募全作品を1点ずつ実見する作品本位の方法によって入選作品を選出しました。続く賞審査では、投票と審議を経て入選作品から9作品の受賞が決まりました。優秀賞の伊藤陽々咲さん、黒澤匠さん、肥沼義幸さんは、吉田さんとともに来年度の「絵画のゆくえ」展に招聘します。

また、「FACE展2026」は、前回FACE2025の



吉田茉莉子《天泣》
 2025年 油彩・蜜蝋／カンヴァス SOMPO美術館

受賞者たちによるグループ展「絵画のゆくえ2026」を併設する初の試みでした。齋藤大さん、春日佳歩さん、Huang Yuqiさん、竹内美樹さんの新作・近作あわせて32点をご紹介します。掲載画像は、自然と人とともにある交感を豊かな色彩で表現する齋藤さんの新作です。

【展覧会データ】
 展覧会名 | FACE展2026
 絵画のゆくえ2026 —FACE受賞作家展
 会期 | 2026年3月7日(土)―3月29日(日)
 主催 | SOMPO美術館、読売新聞社
 特別協賛 | SOMPOホールディングス
 特別協力 | 損保ジャパン
 後援 | 文化庁、東京都、新宿区

主な作品貸出協力

2025年度は所蔵作品を8つの展覧会に出品しました。また、網走市立美術館が企画した「東郷青児×ジョルジュ・ルオー」展の開催に協力しました。

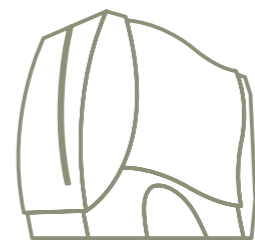
- ◆東郷青児作品31点、ジョルジュ・ルオー版画14点
 「網走信用金庫100周年事業 SOMPO美術館 東郷青児×ジョルジュ・ルオー」(網走市立美術館 9月26日―11月9日)
- ◆東郷青児《ビルスブ・ルーベ》、《自画像》、《ベッド》、《子供》
 「藤田嗣治―7つの情熱」(パラミタミュージアム、

- 神戸市立小磯記念美術館、鹿児島市立美術館、ふくやま美術館を巡回)
- ◆ビエール＝オーギュスト・ルノワール《帽子の娘》
 「第20回世界パラ会議福山大会記念事業 Rose イメージの系譜 ―ルドゥーテからシャガール、北斎、芦雪、『ベルサイユのばら』まで」(ふくやま美術館 4月5日―6月8日)
- ◆東郷青児《超現実派の散歩》、《パラソルさせる女》
 「OPAM開館10周年記念 LINKS 一大分と、世界と。」(大分県立美術館 4月26日―6月22日)
- ◆ポール・ゴーガン《アリスカの並木路、アルル》、岸田劉生《虎ノ門風景》、リヒャルト・ロラン・ホルスト「ファン・ゴッホ展」(1892年)カタログ
 「ゴッホ・インパクト ―生成する情熱」(ポーラ美術

- 館 5月31日―11月30日)
- ◆奥村土牛《朝顔》
 「再興第110回院展記念 同人たちの出世作といま 無窮をめぐして」(松坂屋美術館 6月24日―8月4日)
- ◆東郷青児《超現実派の散歩》
 「おさんば展 一空也上人から谷口ジローまで」(滋賀県立美術館 9月20日―11月16日)
- ◆東山魁夷《潮音》
 「東山魁夷館開館35周年記念展 東山魁夷 永遠の海 ―私は、いま、波の音を聴いている」(長野県立美術館 10月4日―11月16日)
- ◆ビエール＝オーギュスト・ルノワール《浴女》
 「令和6年能登半島地震・令和6年奥能登豪雨復興支援事業 ひと、能登、アート。」(金沢21世紀美術館 12月13日―2026年3月1日)

REPORT 2025

S o m p o M u s e u m o f A r t



2025年度は、4つの企画展「藤田嗣治―7つの情熱」、「大正イマジユリの世界」、「モーリス・ユトリロ展」、「モダンアートの街・新宿」に加え、年度末に公募展「FACE展2026」と前年のFACE受賞作家による「絵画のゆくえ」を同時開催し、多くの皆さまにご鑑賞いただきました。また、2026年に開館50周年を迎えるにあたり、これを記念する特別ロゴとメインテーマ「美術・新宿・ココロの再発見。」を制定しました。「モダンアートの街・新宿」展を皮切りに約14か月間にわたって50周年記念プロジェクトを展開します。これからもSOMPO美術館は、美術と新宿の街と、皆さまとともに歩んでまいります。

記念ロゴについて

当館は「美術がもたらす心の自由を大切にしたい」というメッセージを込めて、2014年より東郷青児の作品《超現実派の散歩》をモチーフにしたロゴマークを使用しています。このたび、開館50周年を迎えるにあ

り、記念ロゴにおいても、心の自由を象徴する《超現実派の散歩》をシンボルに採用しました。次の50年も美と自由の大切さを忘れずに歩み続けたい、という想いを込めています。



藤田嗣治《雪中のフードの少女》
 1929年 黒鉛・水彩・グアッシュ／カントンに貼った紙
 Yコレクション(ベルギー)
 © Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2025 E5763

藤田嗣治―7つの情熱

様式の変遷をたどるという意味では難解ですが、人間藤田の作品に対する思いに少しでも近づくことができたのではないのでしょうか。

また本展覧会では第二部としてフランス滞在中に藤田が現地で交流した9人の日本人作家(川島理一郎、海老原喜之助、岡鹿之助、東郷青児、高野三三男、高崎剛、板東敏雄、小柳正、田淵安一)の作品をあわせて展示し、多くの画家に慕われていた藤田の横顔を紹介しました。

なお、年代という「横軸」ではなく主題という「縦軸」で紹介する本展の特徴を鑑み、会場では「鑑賞ガイド」として藤田の略年譜を配布しました。



藤田嗣治《マドレーヌの肖像》
 1932年 水彩・墨／紙 個人蔵(エルサレム、イスラエル)
 © Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2025 E5763

2025年4月から6月まで当館で開催された「藤田嗣治 7つの情熱」は、「自己表現」「風景」「前衛」「東方と西方」「女性」「子ども」「天国と天使」という、藤田嗣治(レオナルド・フジタ)が「情熱」を注いだ7つの主題で構成された展覧会です。年代ではなく分野ごとに紹介したこの展覧会は、



【展覧会データ】
 展覧会名 | 藤田嗣治 ―7つの情熱
 会期 | 2025年4月12日(土)―6月22日(日)
 主催 | SOMPO美術館、日本経済新聞社
 特別協賛 | SOMPOホールディングス
 特別協力 | 損保ジャパン
 協力 | 日本航空
 後援 | 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ、新宿区、J-WAVE
 企画協力 | プレントラスト
 企画・総監修 | シルヴィー・ビュイソン
 日本側学術監修 | 矢内みどり



竹久夢二・表紙絵「汝が碧き眼を開け」(セノオ楽譜56番) 1917年初版/1927年7版 個人蔵

大正イマジュリイの世界

—デザインとイラストレーションの青春 1900s—1930s

谷区立松壽美術館で開催されて以来、全国を巡回する本展は、監修の山田俊幸氏の膨大な収集品をもとに主催館の所蔵品などを適宜加えて構成されてきました。

当館では、藤島武二、竹久夢二、岸田劉生、高島華宵や小林かいち、古賀春江などの主要作家に当館の東郷青児作品を加え、全体を時系列に「新しい芸術と抒情」「さまざまな意匠」「流行と大衆の時代」の3部に大別して展示しました。会場で配布した鑑賞ガイド(A5判16頁)には、時代背景の解説とあわせて2024年11月に急逝された山田氏執筆の「大正イマジュリイの印刷」

を収録。山田氏に追悼の意と謝意を表すとともに、多大なご厚意を賜った関係諸氏と、猛暑のなかご来館いただいた38,973名の皆さまに感謝いたします。



【展覧会データ】
展覧会名 | 大正イマジュリイの世界
デザインとイラストレーションの青春
1900s—1930s
会 期 | 2025年7月12日(土)—8月31日(日)
主 催 | SOMPO美術館、毎日新聞社
特別協賛 | SOMPOホールディングス
特別協力 | 損保ジャパン
協 力 | 大正イマジュリイ学会
監 修 | 山田俊幸
後 援 | 新宿区、TOKYO MX
企画協力 | 株式会社キュレーターズ

「イマジュリイ」とは、絵葉書などの大量に複製される絵を意味するフランス語です。日本では、明治後期から昭和初期までに技術革新が進んで華やかな図像の印刷が可能になり、出版文化が花開きました。本展は、そこに創造的な足跡を残した作家12名と9つのテーマを取り上げ、出版文化と美術にまつわる約330点によってデザインとイラストレーションの黎明期をご紹介した企画です。2010年に洪



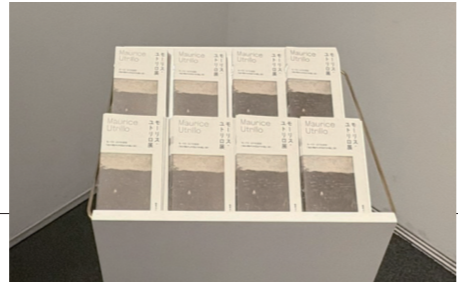
会場で配布した鑑賞ガイド

モーリス・ユトリロ展

調とする画面から色彩へと移る表現の変遷をたどり、同一モチーフの反復、建築の輪郭や空の扱い、絵の具の層が生む物質感に注目し、写真や印刷が視覚経験を変えた20世紀に、なお絵画で街を描くことの意味を問い直し、名所絵でも記録でもない「生活の場としての街」の気配を浮かび上がらせたユトリロ像を示しました。さらに、日本で作品が広く複製され親しまれてきた受容史も踏まえました。無償配布した鑑賞ガイド

では、第一次世界大戦中に書かれた自伝的テキスト『幼少期から今日までの話』の一部を紹介し、作家への理解を促しました。

鑑賞ガイド モーリス・ユトリロ自伝「幼少期から今日までの話」(抄)



エコール・ド・パリの画家のひとりとして数えられるモーリス・ユトリロ(1883-1955)の初期から晩年までの作品、書簡・手稿等の資料を通じて、作家の全体像を提示しました。「モンマルトルの画家」という通俗的イメージで語られがちなユトリロは、都市風景を主題に、近代絵画の核心である「見ること／描くこと」を独自の方法で更新した画家でした。白を基



モーリス・ユトリロ(ラバン・アジェル) 1910年 油彩/カンヴァス ボンビドゥセンター/国立近代美術館・産業創造センター © Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. GrandPalaisRmn / Bertrand Prévost / distributed by AMP © Hélène Bruneau 2026

【展覧会データ】
展覧会名 | モーリス・ユトリロ展
会 期 | 2025年9月20日(土)—12月14日(日)
主 催 | SOMPO美術館、朝日新聞社、テレビ朝日
特別協賛 | SOMPOホールディングス
特別協力 | 損保ジャパン
協 力 | 日本航空
後 援 | 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ、新宿区
企画協力 | IS ART INC.

夏休みのワークシートキット



1976年、SOMPO美術館は西新宿に開館しました。以来、この地で活動を続け、本年開館50周年を迎えました。

当館の大きな特色は、東郷青児の最大のコレクションを有すること、そしてフィンセント・ファン・ゴッホの《ひまわり》をアジアで唯一所蔵する点にあります。本展は、当館50年の歴史において、新宿ゆかりの美術を取り上げる初の試みとなりました。明治時代末期、新宿に

「大正イマジュリイの世界」展にあわせ、展示作品のデザインを活かしたブックカバー作成キットを制作しました。文庫・新書・コミックに対応した13種類のデザインと、同デザインのぬり絵素材(計26種)を収録。展示への関心を深めるツールとして、また手作り素材としてご家庭や様々な集いの場で幅広くご利用いただけるよう、当館HP上で配布しました。

開館50周年記念 モダンアートの街・新宿

は新進的な芸術家たちが集まり、活発な活動の場を持ちました。その後も芸術家たちが芸術家たちを呼び込み、新宿は近代美術の大きな拠点の一つとなりました。



中村龔(頭蓋骨を持てる自画像) 1923年 油彩/カンヴァス 公益財団法人大原芸術財団 大原美術館

新宿と美術をめぐっては、これまでも重要な展覧会が数多く開かれてきました。本展の大きな特色は、中村龔、佐伯祐三から松本竣介、宮脇愛子まで、新宿ゆかりの芸術家たちの約半世紀にわたる軌跡をたどったことにあります。新宿の美術館としてのみならず、全国的にも類例を見ない企画となりました。本展の開幕にあわせ、開



松本竣介《立てる像》1942年 油彩/カンヴァス 神奈川県立近代美術館 ©上野則宏

館50周年を記念する式典が開かれました。当館は、「美術・新宿・ココロの再発見。」をテーマに、約14か月にわたって記念企画を開催してまいります。その幕開けを宣言する、意義深い場となりました。



記念式典の様子

【展覧会データ】
展覧会名 | 開館50周年記念 モダンアートの街・新宿
会 期 | 2026年1月10日(土)—2月15日(日)
主 催 | SOMPO美術館、東京新聞
特別協賛 | SOMPOホールディングス
特別協力 | 損保ジャパン
後 援 | 新宿区、TOKYO MX

2025年度の鑑賞教育活動

新宿区立小中学校を対象とした「対話による美術鑑賞教育」支援事業は、今年度18年目を迎えました。子どもたちは休館日の美術館で本物の作品と出会い、「見て、感じて、考えて、話して、聞く」活動を楽しみました。2025年度は小学校29校中29校、中学校10校中7校。小学校の鑑賞会では、活動の最後に

グループとボランティアガイドによる「ふりかえり」を実施しています。作品に囲まれた展示室で交わされる子どもたちのコメントは、作品と向き合ったからこそその言葉で、心に響きます。事業を支えるボランティアガイドスタッフは、今年度17期生11名が新たに加わり、総勢88名で活動を展開しました。講演会では、NHK放送文化研究所の鎌倉千秋氏より、伝わる

話し方や対話を創り出すファシリテーションをご指導いただきました。研修を通じ、ボランティア活動の充実を図り、子どもたちとの対話がより魅力的な時間となるよう努めています。

